

非妊娠時におけるヒト子宮収縮の観察(1) 子宮筋腫を伴う子宮の収縮

吉野 修/大須賀 穰/恩田 貴志

Summary

着床時、子宮内膜の蠕動様運動は減少することが知られている。この事実に基づき、不妊治療としてオキシトシン受容体のアンタゴニストが妊娠率向上に寄与するとのメタアナリシス解析による報告が複数ある。また、われわれは筋層内子宮筋腫の一部には異常子宮内膜蠕動様運動を誘導することで不妊症の原因になっている可能性、および子宮筋腫核出術の与える効果について検討を行ってきた。

Key words

子宮筋腫
妊娠
MRI
子宮収縮
atosiban

子宮収縮

子宮収縮の評価法として、子宮内腔に挿入した圧トランスデューサーや、超音波および動画MRI(cine MRI)による方法がなされてきた¹⁾。この運動の頻度および方向は月経周期によって大きく変動することが知られている²⁾。特に月経期および排卵期に子宮収縮の頻度が大きい。月経期には子宮底部から頸部方向に運動することで、月経血を子宮内腔より排出する作用があると考えられている。また、排卵期は子宮頸部から底部に向かって運動することで、精子を汲み上げる働きをしていることが考えられている¹⁾。一方で着床期には、子宮内膜の運動はほとんどみられなくなる¹⁾³⁾。その意義として運動を抑制することで、胚の子宮内膜への着床を促していることが予想されている⁴⁾。これら子宮内膜の蠕動様運動は女性ホルモンにより制御されており、エストロゲンは運動亢進に、プロゲステロンは運動抑制に寄与することが知られている⁵⁾。

子宮収縮と妊娠率について

子宮に器質的異常を認めない不妊症患者を対象に超音波断層装置を用いた子宮内膜蠕動様運動の報告がこれまで多くなされている。Fanchin らは体外受精-胚移植(*in vitro* fertilization - embryo transfer; IVF-ET)患者の採卵周期の胚移植時に子宮内膜運動回数と妊娠率を比較し、運動回数が少ないほど妊娠率が高くなり²⁾⁶⁾、また血中プ

Osamu Yoshino

北里大学医学部産婦人科准教授

Yutaka Osuga

東京大学大学院医学系研究科産婦人科学教授

Takashi Onda

北里大学医学部産婦人科主任教授